

2021年12月5日 主日礼拝 アドヴェントⅡ 世界祈禱週間を覚えて
説教題「この命の言葉を」使徒言行録5章17～32節

主任牧師 加藤 誠

「行って、神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」(使徒言行録5章20節)

アドヴェント(待降節)の二週目を迎えました。待降節とは主イエスの降誕を「待つ」のですが、それは「もういくつ寝るとお正月」のように「あと何日すればクリスマス」と「指折り数えて待つ」ことではありません。神さまが今、この世界に注がれている祈りに心を合わせて「わたしにできることは何だろうか、わたしがささげられるものはなんだろうか」と祈りながら「待つ」。神さまに向かって心と体を向けて「積極的に待つ」ことです。アドヴェント第二週のろうそく～平和の灯～に則して言うなら、「神さま、あなたの平和が地の上になりますように」、「わたし自身が主イエスから平和を受け取り、自分の周りに平和をつくりだす者とさせてください」と祈りながら、クリスマスに向かって歩むことです。

昨日12月4日はアフガニスタンで中村哲さんが凶弾に倒れて二周年の日でしたが、新聞では、今年の夏の政変で治安や経済が悪化し一時中断していた現地のペシャワール会による「かんがい事業」が再開されたことが報道されていました。新聞には「数々の試練の中にあっても、我々は道しるべのない闇夜を歩いているのではない。中村哲というともしびがある」という、ペシャワール会の村上会長の言葉も紹介されていました。中村哲さんは福岡の西南学院中学校で聖書を手にしてイエス・キリストと出会い、15歳の時に香住ヶ丘バプテスト教会でバプテスマを受けました。牧師は藤井健児先生という視覚障害者の方で、中村哲さんは「目の見えない藤井先生が牧師として人々のために働いている。僕も人びとのために働く人になりたい」とバプテスマを受け医師を目指したといいます。中村哲さんは「誰もそこに行かないから、我々が行く。誰も行かないから、我々がする」と言われて、アフガニスタンに行かれました。なぜ、誰も行かないのか。危険だからです。その危険を承知で中村哲さんはそこに赴かれました。中村哲さんは平和についてこう語っています。「平和は戦争以上に忍耐と努力を必要とする。世界を覆う暴力主義。それは我々の敵だ。けれど、その敵はわたしたち自身の中にも潜んでいる。憤りと憎しみを平和への意志に変えていく努力。その努力なしに平和をつくりだすことはできない」。クリスマスに向かうアドヴェントの時、主イエスから受けとった平和をアフガニスタンの人々と一緒に生きた中村哲さんの生涯を覚えつつ「わたしも主イエスの平和を生きる者とさせてください」という祈りをささげていきたいと思ひます。

さて今朝ご一緒に開いたのは、弟子のペトロたちが捕まっていた牢屋から天使によって救出されて、ユダヤ教の指導者たちを前に「イエス・キリストこそ、救い主である」と大胆にも証言した場面です。「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」(5・20)。天使からそう励まされた弟子たちは、この

直前の4章で「もうイエスの名で語ったり、教えたりするな！」と厳しく脅されていたにも関わらず、また主イエスの名で語り始めるのです。このペトロたちは主イエスの十字架の場面では雲隠れしてしまった者たちです。彼らは相変わらず「無学で普通の人」（使徒4・13）でしかありません。ただ一つ違ふとすれば、彼ら自身が「祈る者」とされたということです。弟子たちはかつて主イエスが独り祈っている時に居眠りしていた者でしたが、「祈るほか何もできない自分たち」であることを知らされた時、彼らは祈るために一つのところに集まる者とされま。使徒言行録1章に書かれてあるとおりです。弟子たちは復活の主イエスから神の国について教えを受け、「この復活の主がついておられたなら百人力。どんな地上の王も怖くない」と力強く思ったことでしょう。が、その主イエスが昇天して天に帰っていかれてみると、主イエスのいない自分たちには「何もできない、何も語れない。無力な自分たちであること」を突きつけられていきます。けれど不思議です。自らの無力を思い知らされた者たちが、「祈るために一つのところに集まる者」にされていったとき、彼らは変えられていくのです。「何か知識を上手に語るのではない。自分たちが見たこと聞いたこと、自分が主イエスからいただいたものを語ればよい。その語るべきことは聖霊が教えてくださる」。神さまの力注ぎ、聖霊の導きをいただいて歩んでいこうと、一つのところに集まり祈る者とされて行った時に、彼らは権力者たちの脅し、暴力に屈することなく、「この命の言葉を人々の間で残らず語る者」に変えられていったのです。

この一週間「世界祈禱週間」を覚えてきました。とかく自分のこと、自分の周りのことで心を一杯にしている私たちですけれども、心の扉を少しでも世界に向けて開き、神と隣人につながる歩みが起こされることを祈りたいと思います。

特に今年はミャンマーのキリスト者たちを覚えて祈りたいのです。ミャンマーでは今年2月の国軍によるクーデター以後、キリスト教会が糾弾のターゲットにされています。多民族国家のミャンマーでは、多数派のビルマ族に仏教徒が多いのに対してキリスト者は少数民族に多いため、以前から差別を受け、迫害の対象となってきましたが、国軍のさまざまな統制に恭順の意を示さないキリスト者を厳しく迫害し「見せしめ」にすることで国民の心の統制を強化する狙いがあるようです。先週の説教でも少し触れましたが、キリスト者の村を焼き払い、コロナ禍で病院に行けない人たちへの医療行為を許可なく行ったという理由でカトリック教会を砲弾で破壊するなど、今日も多くの涙が流されていることを聞いています。が、しかしそのミャンマーにおいて、キリスト教会の「祈り」は弱まることなく熱くささげられ続けています。そのミャンマーに一日も早く神さまの平和がなるように。人を脅し、尊厳を傷つけ、命を奪う暴力の支配の誤りが示されて、人びとが武器を置く日が来るように。人々が自分の大切にしたいことを自由に表現できて、それぞれの信仰が尊重され、民族による差別がなくなり、子どもたちが笑顔で学校に行ける日常が戻るよう、祈りを合わせたいのです。